柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 182 号

草創期の柿生中学校-補遺

その3　生田中学校での生活

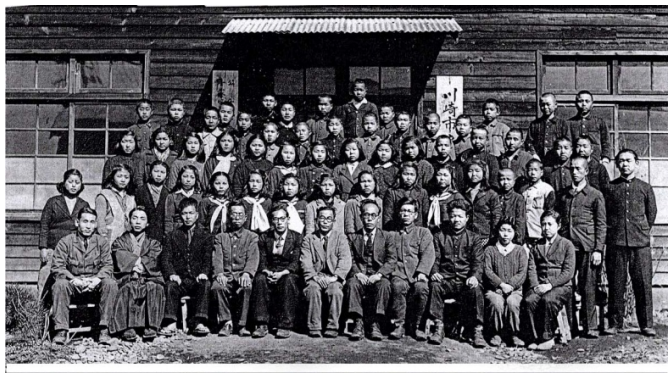
小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

生田中学校の開校も市内の他の中学校と同じように昭和 22 年の 5 月 5 日でした。柿生中学校編で記したことですが、開校当初は普通に授業が行えるような状態ではありませんでした。生田中学校は、自前の校舎を持てたとはいえ、あちこち雨漏りはする、窓のガラスは割れていて、ふき殴りの雨では、室内がびしょびしょとなる校舎です。広くて 3 学年分のスペースは十分なのですが、中はがらんどうで机も椅子も黒板もありません。小学校に高等科の使っていた数教室を融通してもらって間借りした学校にはない苦労も多かったのです。

柿生国民学校高等科を昭和 22 年 3 月に卒業して、新制生田中学校に 3 年生として入学した 30 人の若者は、下級生たち以上に向学心に燃えていました。高等科 1 年の 8 月に戦争は終わりましたが、男子生徒は毎日のように、農作業の男手を欠く出征兵士の留守家庭に、貴重な男子労働力として派遣され続けていたのです。不足する食糧増産が当時の日本では喫緊の課題だったのです。女子生徒も託児所での子守や賄い仕事、縫製作業などに駆り出されて、ほとんど勉強などさせてもらえずにいたのです。学校に通っているはずなのに、ちっとも勉強ができない鬱憤はたまる一方だったのです。高等科の卒業が間近に迫る中、先生たちが「新制の生田中学校が、柿生国民学校高等科の卒業生も 3 年生として受け入れてくれる。もう 1 年勉強してみないか。」と知らせてくれました。栗木にお住いの鈴木善孝先生は、特に熱心に学業の継続を勧めて下さったそうです。こうして 30 名が超満員の小田急線で生田中学校へ通うことになったのです。

しかし、開校当初の学校は、まずは学習環境を整えるための作業を日々続けざるを得ない状況にありました。後輩の 1 年生や 2 年生を含めて、教科書もなく、先生も揃わない状態です。校長先生は日々先生のスカウトに走り回り、校長代理の先生は教室備品の調達に明け暮れる日々だったのです。私がお話をうかがうことのできた土方工作、井上美佐子、村野冨士江、中山吉弘の皆様は、「土間のようなところに車座になって、生徒同士勝手にしゃべっている時間が多かった。」「勉強らしい勉強が出来るようになったのは、冬に入ってからだった。確か 12 月にはなっていた。ガリ版のプリントを使って勉強した。」などと、当時を懐かしむようにお話しくださいました。

「机や椅子がもらえるというので、開校してかなり経ってからだったが、多摩川の土手道伝いに高津まで歩いて行き、机は 2 人で、椅子は 1 人で担いで学校まで戻った。汗だくでみんなクタクタになったことを覚えている。」高津のどこに行ったかは曖昧でしたが、大変な重労働ですから、皆さんに強烈な印象を残した出来事でした。当初いらした先生たちは、ほとんど代用教員だったようで、1 年後にはお役御免でほとんどが退職されていることが、学校に残る歴代教員名簿で確認できます。英語の先生はなかなか着任せず、代理で英語の授業に出てきた先生は、music をミューサイクと発音するひどさだったのです。たまりかねて生徒の 1 人が「先生、ミュージックじゃないですか」と発言すると、「そうも言う」と澄まして答えたというのです。生徒が音楽の先生に事情を伝え、ようやくミューサイクは正式に否定されたのだそうです。　（続く）

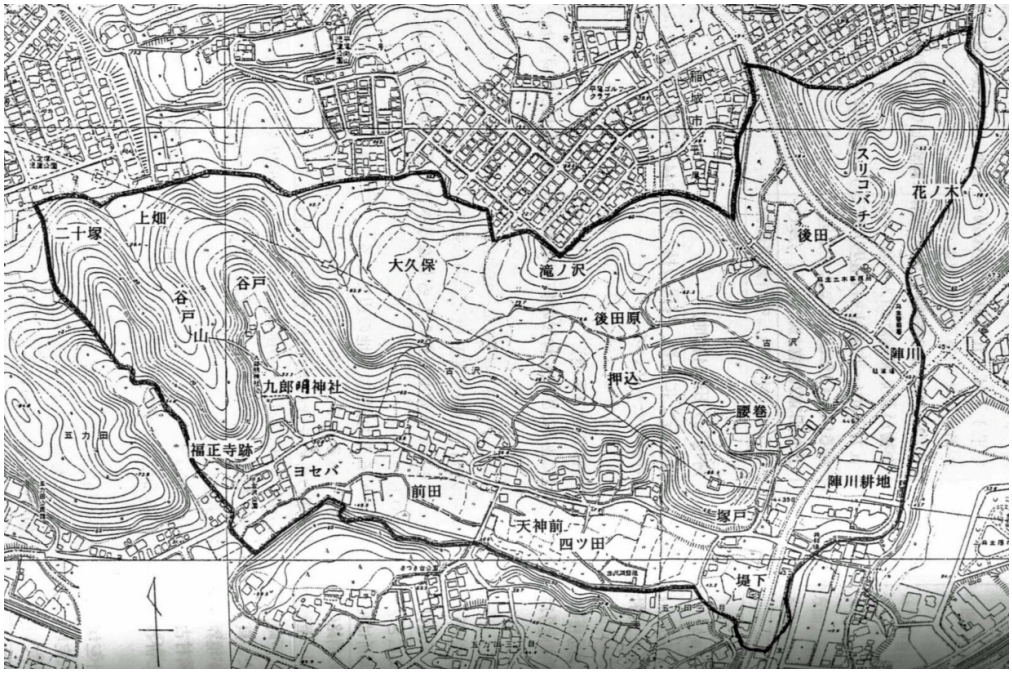


卒業写真　上：A 組　下：B 組

シリーズ
麻生区の地名　その7

古沢の地名

菊地恒雄（日本地名研究所 研究員）



『川崎地名辞典（下）』の古沢村より

古沢村の名が資料に初めて載るのは、江戸時代の寛永元年（1624）で旗本の朝倉織部正の知行所とあります。正保年間（1644～48）の『武蔵田園簿』に「朝倉氏知行古沢村　高 65 石 7 斗余、うち田方 47 石 9 斗余、畑方 17 石 7 斗余」と記載されているところから、耕地の 3 分の 2 以上が水田であったことがわかりますが、村の多くは山林であったと思われます。その後も明治になるまで朝倉氏が知行していたようで、明治元年（1868）の『旧高旧領取調帳』に「朝倉氏　高 91 石 9 斗余」と記され、開墾が進んでいたことがわかります。

江戸時代より前は、片平郷の一部で枝郷として存在しており、江戸初期に片平郷から独立して古沢村が成立します。

古沢（ふるさわ）の村名の由来は伝えられていませんが、村内を流れる河川（沢）沿いに村の中心があったことによる名ではないかと思われます。村名主の古沢さんはコザワと呼び、村名と区別しているのも関連があるのかもしれません。

明治初期に村内に字が付けられますが、古沢村では村内に一つのみの字としています。「都古（つこ）」と付けました。都筑郡古沢村の頭文字を採って、都古としたというのです。土地台帳では使われますが、普段に村民が呼称として使うことはなく、通称地名が村内の住所のように存在します。江戸時代に存在した小名は 2 つしかなく、神川（じんかわ）と大久保（おおくぼ）だけです。神川は地元では陣川ともいい、戦国時代の小沢原合戦の陣幕の故事によるといいます。大久保は古沢の北の台地付近をいい、深く入り込んだ窪地の意味で、通称地名に滝ノ沢があります。滝は必ずしも水の流れる滝とは限らずに崖を意味する場合があり、谷戸の源頭部に位置しています。

古沢の流れが麻生川に流れ込む付近を堤下（つつみした）といい、地元では麻生川を大川（おおかわ）と呼んでいます。麻生川のさらに上流部を神川として使い分けているようです。

五力田境に福正寺跡があります。稲城市坂浜の新義真言宗高勝寺の末寺でしたが、明治 5 年に廃寺となり、寺のあった場所の下の谷戸を寺谷戸（てらやと）と呼んでいます。

古沢には九郎明神社がありますが、『風土記稿』には久能社とあり、明治の村誌では九朗社とあり、同じ九郎明神社と思われます。現在の祭神は源義経とされています。御霊神社の性格を持つ神社と思われます。この神社近くには昔の高札場跡があり、寄せ場（よせば）という村の中心でした。大正期には古沢・五力田養蚕組合を設立し、福正寺跡地に古沢と五力田が共同で「稚蚕共同飼育場」をつくって、卵から孵った幼虫を 3 眠までここで共同で育ててから各農家に配るなど、周辺の村からも頼りにされるほどでした。

万福寺境には万福寺と同じ地名の花の木やスリコバチの地名があります。旧道沿いに腰巻と塚戸の地名があります。腰巻は山（台地）の縁辺部に付く地名で、麻生川が削った地形のことと思われます。塚戸は古沢村の中心部に入る交差点の目印のことかもしれません。

古沢の水田地帯には天神前、四ツ田、前田などの地名がありました。天神社や弁天社は大正 11 年に九郎明神社に合祀されています。

五力田・平尾との境に二十塚（にじゅうづか）の地名がありますが、詳しくは五力田の地名で紹介します。

シリーズ
教育の歩み　番外編

ゆとりの教育をめぐって（８）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

小学校から外国語(主に英語)教育をという声の高まりを受け、2012年からの学習指導要領では、小学校でも外国語教育が導入され、中学校の英語教育もヒアリングと会話中心に大きく変更されました。国際化が急速に進展する時代ですから、外国文の読解よりも、会話力の方が大事だということは理解できます。確かに明治以来の外国語教育は、ともかく西洋文明を速やかに日本に取り込み、日本を西洋並みの文明国に引き上げることに主眼がありました。そのため、まずは必要な文献を翻訳し日本語で読めるようにすることが必要だったのです。そのため外国語教育も勢いどう日本語に訳すかに主眼が置かれたのです。それでも明治のリーダーたちは、西欧文明に憧れ、日本に取り入れるのは大いに結構としながら、日本人の心は失ってはならないと強調し、「和魂洋才」を国是としたことでも知られています。

どの国の言語にも、他国語に訳すことに難渋する言葉があります。宗教的世界を含む精神世界は、夫々の国、地域で独自性を持つからです。地球上の国々は、夫々異なる気象条件を持ち、その条件と折り合いをつけながら暮らしていくため、人々の受け止める心象風景は、まさに地域ごとに違っているのです。近代国家、いうなれば国民国家の形成過程を勉強すると、地域的な覇権を掌握しつつあった覇王は、自らの属する地域言語を掌握した地域にまで浸透させようと、あらゆる努力を惜しまず、精力的に行動していることが分かります。近代国民国家は、各国の国語の誕生とセットで登場するのです。

日本の場合は日本語になるのですが、各国の言語には夫々独自の精神世界を著す独特の表現があり、それは簡単に他国語に置き換えられるような言葉ではないのです。韓国語、中国語、英語、フランス語などどの言語をとっても同様です。言葉は意思伝達の手段であると同時に文化そのものでもある。それほど大切なものなのです。

小学生にも外国語教育をという教育課程の編成が話題になった頃、英語も日本語と共に国語にしてはどうかという主張が、声高に叫ばれ一時期マスコミをにぎわしたことがありましたが、これは言葉の文化性を理解しない人たちの暴論に過ぎません。独自の言葉を失った民族は滅びます。言語という自らの依って立つ最も大切なアイデンティティを失ってしまうのですから…

「ゆとりの教育」は、児童・生徒にじっくり考え、しっかり理解する時間を確保することを目標に導入されました。正しく導入されたなら、児童・生徒の考える力は大きく伸びたことでしょう。残念ながら「ゆとり教育で学力低下」の大合唱で、揺り戻しにあってしまったのですが、ここへきてIT教育の進展などから、考える力の重要性がマスコミなどにも認知される雰囲気が生まれ、思考力を育む教育の重要性が認識されるようになってきました。大きく遠回りしましたが、近く再挑戦が可能になるかもしれないと、多少の期待が持てるようになってきたように感じています。ただ、道は遠いです。一方で優秀な子も確かに存在するのですが、前回指摘したように、文章を読み解く以前に長い文章を読む忍耐力が大きく落ち込んでいる現実に直面すると、ここからの国語力の再建には、長い努力が必要です。

最後に覚えること、記憶に留めることと、覚えたことを生かして使うことの関連について一言します。幼児が言葉を覚え、記憶する過程を思い出してください。言葉を発した幼児は、しきりに「これは…これは…」を連発して、何度も同じ言葉を繰り返し言ってもらって、言葉を覚えます。面倒だなと思いながら、答えていた記憶をお持ちの方も多いでしょう。こうした反復練習は学びの初期の段階では欠かせません。特に小学校４年生くらいまでは、ともかく覚えなければならないことが次々に出てきます。高い山は広い裾野を持っています。富士山しかり、赤城山や羊蹄山しかりです。基礎的な知識をしっかり覚えることなしに、豊かな高い知的レベルに到達することは出来ないのです。小学校５年生や6年生でも、中学生や高校生でも、さらには大学生でも覚えるべきことは出てきます。しかしこの段階では、ただ暗記するのではなく、なぜこうなるのか、なぜ正しいのかを考え検証して納得する過程を経ることで、生涯忘れることのない記憶の襞にしっかりと焼き付けて行く作業が大切になるのです。

「ゆとりの教育」が目指したゆとりとは、考え納得するための時間を確保することを意味していました。そのために教育内容の洗い直しが提案されたのです。ネーミングのまずさが、せっかくの大改革構想の挫折を招いてしまったことは、誠に残念なことでした。【完】

寺社の風景

琴平神社の鳥居あれこれ

琴平神社　宮司　志村幸男

本殿鳥居　現在の姿

当神社の本殿鳥居は、幕末に建てられ、鳥居の上に石像が置かれる市内では珍しい形をしておりましたが、長い年月で劣化が激しく、残念ながら川崎市の指定文化財への登録は断念致したのですが、この機会に鳥居とはどのようなものなのか、記させていただきます。

①鳥居は神社を象徴する建造物で神聖、清浄を表しています。

神様の世界と人間の世界を分ける境界の意味で建てられていて、神々の鎮まる神域をお護りしています。社(やしろ)を持たない「山」や「泉」「海」などを御神体として祀られている所にも鳥居が建てられています。また、境内の広い神社では、「一の鳥居」「二の鳥居」と鳥居が続いたり、他にも神社によっては門が立っている所もあります。これを「神門」と言います。

鳥居の「鳥」はニワトリのこと。天照大御神が、素戔嗚尊(すさのおのみこと)の悪事を憂いてお隠れになり、世の中が真っ暗になってしまった時に、知恵の神の思金神(おもいかねのかみ)が「常世の長鳴鳥(とこよのながなきどり)」ニワトリの長い美声で、天照大御神に出て来てもらい、世の中に再び光明を照らし明るくして頂こうと鳴いたニワトリの止まり木が、鳥居の始まりと伝えられています。

②神社の鳥居は倒れにくくなっていて、土台の部分を沓石(くついし)と言う、石の中が空いている所に柱を差し込み、楔を隙間に入れて地震や強風に耐える構造になっています。

鳥居の材料は「木材」「石」「金属」「樹脂」と色々あります。

種類も多く、神明(しんめい)鳥居、明神(みょうじん)鳥居、稲荷(いなり)鳥居、山王(さんのう)鳥居、伊勢(いせ)鳥居、春日(かすが)鳥居、両部(りょうぶ)鳥居、注連(しめ)鳥居、中山(なかやま)鳥居、鹿島(かしま)鳥居、奴彌(ぬね)鳥居、唐破風(からはふ)鳥居、黒木(くろき)鳥居、宗忠(むねただ)鳥居、八幡(はちまん)鳥居、住吉(すみよし)鳥居があります。

③当神社の鳥居は、本殿は明神鳥居、儀式殿は稲荷鳥居となっています。

安座していた僧上坊と小天狗(烏天狗)

本殿の鳥居は、嘉永 2(1849)年 6 月に建てられました。そこには石の社額が飾られ、その文字は江戸蔵前大護院住道本氏筆と伝えられています。現在は傷みが醜く、落下すると危険な為、資料館に収蔵しております。また以前は鳥居笠の上に烏天狗と僧正坊(そうじょうぼう)の石造が置かれていましたが、台風で落下したため、傷んだ所を修復し、これも資料館に安置しております。烏天狗は山伏装束で鳥のような嘴を持った顔をし、自由に飛翔する能力を持った伝説上の生物で、また、妖魔退散の力があると伝えられています。なぜこの烏天狗が祀られていたかと言うと、讃岐の「こんぴらさん」の海域では海が荒れることがあり、荒波に遭遇した時に「こんぴらさん」に向かって祈ったところ、天狗が降りて来て安全に導いてくれたとの伝承があり、海の安全、交通安全の神社として信仰を集めており、その伝えから、私共の神社にも鳥居の上に祀られたものと思われます。

保存されている僧上坊と烏天狗

儀式殿の赤い鳥居は、高さ 13m、横幅 14mの大鳥居となっています。平成 3(1991)年 3 月に建て替えられたもので、社額は讃岐金刀比羅宮(琴陵光重氏筆)です。

神社の参拝で鳥居の種類の違いを見るのも良いかと思います。

柿生郷土史料館催物案内　【参加自由、入場無料】

◎開 館 日：７月２・９・１６・２３日（毎日曜日）　８月５・19・２６日（毎土曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時

第８７回
カルチャーセミナー

柿生の名品「禅寺丸柿」の歴史

日時：７月１６日（日）　13 時 30 分～15 時 30 分
講師：相澤　雅雄氏（地域史研究家）
会場：柿生郷土史料館特別展示室(予定)

禅寺丸柿の栽培法から江戸への出荷のあれこれ、愛知県枇杷島市場への出荷に関する新出史料が語ることなど、お話いただきます。